令和７年度　第３回がまごおり協働まちづくり会議　会議議事録要旨

日　時　令和７年１２月８日（月）午前１０時～
場　所　蒲郡市役所　本館３階　３０４会議室

１　開会

２　議題

⑴　協働のまちづくり推進事業について（別紙１）

事務局より、まちづくり助成金事業、指針推進事業について説明

・まちづくり事業助成金の令和７年度事業について、事業目的が達成されているかどうかが一番大事。イベント自体の実施や、参加者の感想だけではなく、どこまで事業目的が達成されたかを実施団体に考えさせ、できていること、できていないことを明確にしておいた方が良い。また、次年度の助成金を申請するとなった際にも、自己評価・反省を踏まえた申請が必要となる。

・まちづくり活動チャレンジ助成金のドッグラン&ドッグカフェについて、ここでの実証実験というのはどういう意味合いか。行政で実証実験と言うと、今のルール等を超えて行う場合等に使うと思うが、ここで言う実証実験の意味合いが知りたい。

・第５期若者議会では、市から行政課題を提示し、施策の検討を行っている。今回のドッグラン＆ドッグカフェ実証実験の事業は、市から提示した市有地の有効活用という課題に対して、若者の視点で検討を行い、政策提案の前に有効性の実証を行うために実施したもので、事業実施の成果を含め、昨日の最終報告会で市に政策提案がされている。

・令和８年度の募集要項について、書類審査の中で経費の減額等を求める場合があるとされたが、公開プレゼンテーションでは経費の減額はできるのか。

・実際に公開審査の中で経費の減額を行うことは難しいとの意見もあり、書類審査での減額を考えたもの。書類審査の段階で審査委員に見てもらい、経費等については事前に団体と調整を行ったうえでの公開審査を考えている。

・そういうことであれば、書類審査に限らず、全体として減額等の可能性があると書いておいた方が良い。他市の審査会でも、予算額に達した場合の減額等、公開審査会の中での経費の減額はあった。

・団体の気持ちを汲むことは大事だが、書類を出したらそのまま通るというのはどうか。

・どこにアウトプットをさせていくかを考えながら、思いをどこに持っていくか、団体と話をしながら一緒に考え、申請のサポートをしている。例えば、当日のイベントは予算の算出をしやすいが、こちらが求めていることは人のつながりや広がりであり、当日の企画よりも、そこにどうアプローチしていくかが事業成果ですという話を繰り返しさせていただいているが、どうしても、当日のイベントや

チラシ作成が見えやすいため、理解いただくのに苦労している。
団体の方々は、やりたいことが、それやることによって世の中がどう変わるのか、そこまで考えが行きついていない方々が非常に多い。自分たちで動きを作っていく、ケアしていくような動きになるように、ディスカッションを繰り返している。
団体の中には、当日のイベントに固守される方もいるが、その場合でも提出書類だけ見れば、書類審査には通るものとなる。一方で、事前の作り込み、その思いについては、明確に表すものがないため、そこのところで押し問答となる。予算については、大切な税金を使うもののため、減額化を求めていくし、その金額が適正かどうか確認しながらサポートを進めるが、見えにくいところに対する理解を掘り下げていくことに苦労している。
・あくまでも税金のため、自分たちのメンバーのためだけにやることなら自分たちだけでやればよく、自分たちだけじゃなく、それがどんな可能性や広がりがあるのかどうかが問われるものである。
まちづくりセンターでのディスカッションを通して、自分たちの当初の思いが変わっていくことが大事だと思う。
目的に立ち戻って、自分たちがやってきたことがどうだったかを考えることが、もしかしたら次につながるかもしれない。やりましたで終わっていると、それで考えなくなってしまうので、少なくとも考える機会は作らないといけない。
・まちづくりの中で、賑わいという言葉が飛び交っている。賑わいが第一との意見もある中、一過性の賑わいではなく、どうやって底上げしながらつなげていくのか、日常に落としていくのかが大事だと考えている。他の部署で企画されている動きでは、動員性や集客を求めるケースが多いため、市民団体側へも浸透してきていると感じる。そういった中で、助成金事業においては、その先を求めることから、押し問答が長いとなってしまう。それぞれの部署で求められているミッションが違う部分があるとは思うが、まちづくりは、仕掛けや、種をどう動かしていくかなどがすごく大事なため、助成金に関してはその部分を重視していくべきではないかと考え、相談に応じている。仕掛けづくりみたいな発想や、これから何年かかけてどうしていくのかという動きについて、または活躍していない人たちにどうやって光を当てながら参加していってもらうのか、そういったコンセプトというのが、この助成金の中にもう少し明確になっていくといいのかなと思う。
・集客ではなく、どうしたら人が行きたくなるのかを考えていかないと、日常化は難しい。評価の在り方を含めて検討していけると良い。
・要項 6 ページの審査項目の中で、協働性の配点が低いが、今の議論だと反対のように感じる。逆に配点を高くするくらいの方が良いのではないか。
・項目によって配点を低くする必要はなく、全項目同じ配点で良いのではないか。
・本会議での意見を踏まえ、要項内容を修正し、委員へ諮ることとする。

⑵　令和７年度まちづくり賞の選考について

事務局より、推薦書について説明

・ノウハウ移転も考えられているところや、他の団体にも広げようとしているところが、まちづくり賞に相応しいと思う。

・団体名について、竹島手づくりプロジェクト実行委員会のときには、漢字の「手」を使っており、竹島弁天てづくり市運営委員会では「て」となっているが、これは正しいのか、誤記なの確認をしてほしい。正しいのであれば、いつから「て」となったか、何かこだわりがあろうか思うので、確認したい。また、確認できるのであれば、団体名変更の時期が分からないため、お願いしたい。

・人材を育てたいコンセプトで代表を若手に変えたとあり、色んな人が関わってきているようにも見えるが、推薦書の中では、新たなメンバーが増えたのか、運営委員会のメンバー的な広がりがどうなのかが分からない部分もあるので、そこが分かると良い。

目的にあるイベントを主催できる人材も育てたいというのは、自分の団体ではない外の団体を育てたいという意味もあると思うが、自分の団体の人の新陳代謝がどうなのかも気になる。

・俊成苑を直した後で、ここをどうしていくのかとなった際には、最初は芝もなく、イベントはさせないと言っていた。そんな折に、まちづくりの助成金にこの団体が手を挙げて、突破口となった経緯がある。彼らは、突破口の意味をちゃんと理解し、自分たちの得たノウハウをどんどんシェアしていくという動きをしており、特にそれが若手の人たちへ広がっている。作家さんが出展で応募してくることは多いが、運営側に回る機会はあまりない中で、結果的に、ここがトレーニングの場所となっている。一方で、推薦者の方にはそこは見えない部分であり、推薦書では分からない部分だが、選考することについては、期待できる部分はすごくあると感じている。運営側のスタッフでは、現在 40 代の人たちが 8 人も入っており、ほとんどみんな作家さん。その人たちが、自分の店を出すことを目的にするのではなく、他の作家さんが生まれてくるという流れに真剣に取り組んでいる。こういった動き、イベントをやったことを評価することよりも、次の人たちを増やしていく動きに対して、すごく注視しており、また、支援していきたいと思っている。

・次年度の助成事業を増やしていく、もっと関心を持ってもらいたいということと重ね合わせてみると、この団体が話す機会を作れると良い。報告会だと助成金をもらった人しか来ないので、幅広い人たちが話を聞き、横につながる機会として、何かやってみてもいい。

まちづくり云々でなくても、自分がやりたいことをどうやって動かしていったらいいのかなどのノウハウや、実践者としての悩み事などを一緒に考えようみたいな何か、良い機会なので活かしていけるとよい。

・まちづくり賞について、誰でも推薦ができるのであれば、活動の実践者など、内実を知った人からの推薦を求めるような動きがあってもいいのかなと思う。

・防災やものづくり、産業や福祉、など様々な分野で活動をしている人たちは、まちづくりと思っている人ばかりではないので、助成金事業の周知については、

関係しそうなところに対して周知ができると良い。庁内で市民団体と付き合いがあるところには周知してもらうなどし、まちづくり事業もチャレンジ助成金事業も多くの募集があると良い。
・令和７年度のまちづくり賞は、「竹島弁天てづくり市運営委員会」を選考することとする。

３　その他
＜今年度の会議予定について＞
・第４回　令和８年３月９日（月）午前１０時～　３０４会議室